

英国初期ブラザレン運動とジョージ・ミュラー

——その分裂と挫折が福祉実践思想形成に及ぼした影響をめぐって——

木原活信

本論では、孤児院創設者 George Müller とブラザレン運動の関係を論じた。その運動の原点である Groves から「フェイス・ミッション」の精神を継承し、組織ではなく、神のみに頼るという精神を孤児院運営の指針に活かした。一方でこの運動「分裂」により、Darby らの主流派から「絶交」された結果、逆説的に「セクト化」から解放され、教派を超えた信仰復興「運動」的性格のオープン・ブラザレンの系譜が生じ、結果的に孤児院実践に注力していくこととなったが、その過程を分析した。

はじめに

I ブラザレン運動とは何か

- 1 ブラザレンの始原
- 2 原点としての「フェイス・ミッションの父」グローヴス
- 3 プリマスでの展開と発展
- 4 神学教理的特徴としてのディスペンセーション主義

II ミュラーとブラザレン運動とのかかわり

- 1 独立伝道者への転身
- 2 ベテスダ集会におけるクレイクとミュラー

III ブラザレン運動の分裂と挫折

- 1 ダービとニュートンの衝突
- 2 分裂の経緯と真相

IV ブラザレン運動分裂の余波とベテスタ集会（ミュラー）

- 1 ベテスタ集会への非難
- 2 ベテスタ集会との絶交と“Exclusive Brethren”の確立
- 3 “Open Brethren”の確立と新しい展開

結論

注

参考・引用文献

はじめに

本論文では、ブリストル孤児院創設者のジョージ・ミュラー（George Müller, 1805-1898）と英国の初期ブラザレン（プレズレン）⁽¹⁾運動の関連に焦点をあてる。そもそもブラザレン運動と社会福祉の歴史とは無関係なように見えるが、ミュラーの思想と生涯を丹念に追っていくと、重要な結節点が見えてくる。彼の孤児事業、福祉実践においてブラザレン運動が直接的にも間接的にも強い影響を及ぼしていることがわかる。本稿では、それがどのように関連し、影響を及ぼしていったのかについて歴史的に詳細に議論していきたい。

ところで、ジョージ・ミュラーについては、これまで信仰者の模範、孤児院創設の先駆者、などいわゆる一連の伝記として多く紹介されてきたが、そのほとんどが偉人伝としての扱いであり、学術的な研究は少ない。ところが、筆者の研究（木原 1993；1998；2018）において議論した通り、山室軍平、石井十次へ及ぼした影響含めて日本の社会事業への影響の大きさを考えても、ミュラーという人物は単に「偉人」としてだけでは済まされないほど重大な影響を及ぼしており、思想的にも詳細な検証が求められるところである。この点において、先に筆者の研究（木原 2018）では、ドイツの敬虔主義との関連においてミュラーの思想を、ハレを舞台にしたフランケ（August Hermann Francke, 1663-1727）との関連からその思想形成の影響と邂逅を明らかにしたところで

ある。

しかしながら、敬虔主義を起点にしたということが明らかになっても、ミュラーの思想の全貌を明らかにするにあたって避けて通れないのは、彼が生涯にわたってコミットし続けたブラザレン運動とのかかわりである。本研究では彼が牧会し、そのリーダーの一人として生涯かかわり続けた教会（以下、当事者たちの表記に準じて「集会」と表記する）創設にかかわるブラザレン運動に焦点をあてる。むしろこの分析なしにはミュラーの生涯と思想は語るることができないし、そのミュラーの思想と実践の全貌を語るうえでは不可欠であるといえる。

ところが、その具体的な歴史過程やその意義については必ずしも十分ではなく、とりわけ本論の主題である福祉思想形成とブラザレン運動の議論の関係は等閑視されてきた。その理由の一つとして、現在にいたるまで当事者は、自ら「ブラザレン」という教派であることを拒否し、また教派性の議論を嫌悪し、そのため独自の教派として自己定義することがなく、そのため研究対象として組上に載りにくかったという点がある。ちなみに日本では戦時中、信仰を貫いたブラザレン（諸集会）のキリスト者（藤本善右衛門、石濱義則氏ら）が弾圧され、思想犯として逮捕された者たちもいたが、国家当局は当初、「集会」という呼称から、内村鑑三の「無教会主義キリスト教」と同じ範疇に入れていたが、取り調べのなかでその違いを認識し、後には「無宗派主義キリスト教」と別枠でカテゴライズした。ここでの「無宗派主義キリスト教」という用語は、自らが一つの宗派であることを拒絶する彼らのアイデンティティを象徴している。⁽²⁾

そこで、本研究において、ブラザレン運動とは何かをまず先行研究より明らかにし、ミュラーがいかなる経緯でこの運動に直接にかかわるようになったのか、そして、その性質上あまり公で語られることのないブラザレン運動の挫折と分裂という「負の遺産」を敢えて歴史の表舞台に出して議論したい。なぜな

ら逆説的にこの分裂がミュラーのその運動とその立ち位置を明確にし、結果的に孤児院事業へのコミットメントとかかわりを強めることになるからである。

I ブラザレン運動とは何か

まず、本稿の議論をすすめるにあたり、「ブラザレン運動」(the Brethren movement)⁽³⁾とは何か(何であったのか)、とういことを明らかにしておきたい。実は、この定義を厳密にすることにも困難さが伴うのは、当事者たちがそれを主体的に定義した呼称ではなく、第三者が歴史的に分類・分析したものに基づくものであるという点である。そもそも、当事者たちは、自らを「ブラザレン」と呼ぶことを否定している。特に、自らがブラザレンというような一つの宗派、教派であることを受け入れていないゆえに定義づけの困難さを伴う。⁽⁴⁾しかし、自らブラザレンと呼ばないという性質こそ、この「運動」の一つの性質が示されているといえる。ただし、近年では、この名称を受け入れて積極的に使用している例も散見されるようになった。

ここでは「ブラザレン」を議論していくために、史家においてすら、曖昧な点が多いものの、神学事典(Dowley 1977; Livingstone 2006)などでは以下のように説明されるのが一般的である。それらを総合すると、19世紀初頭のイギリス(アイルランド)で起こった信仰回復運動、教会刷新運動のリバイバル運動で、特に当時国教会に属していた聖職者、神学者ネルソン・ダービ(John Nelson Darby, 1800-82)らが主導したとされ、やがて国教会から離れて独立したグループ(群れ)となっていく。⁽⁵⁾ダービのみならず、それにかかわる主要人物では、本論の中心となる孤児事業のジョージ・ミュラー、説教者として著名なロバート・クレバー・チャップマン(Robert Cleaver Chapman, 1803-1902)、現代でも著名な神学者F. F. ブルース(Frederick Fyvie Bruce, 1910-1990)らの錚々たる名前が連なる(Dowley 1977; Livingstone 2006)。なお、

日本では、「同信会」系として、宣教師ハーバード・ジョージ・ブランド (Harverd George Brand, 1863-没年不詳)、朝鮮伝道に出かけた乗松雅休 (1863-1921)、白洋舎の五十嵐健治 (1877-1972) らの名前も挙げられる。歴史家の意見も分かれるところであるが、ブラザレンを、その結果を強調して一つの独立した「セクト (宗派)」としての「キリスト諸集会」とみるか、その過程のブラザレン「運動」(movement) としてみるかは意見が分かれるところである。セクトとはここでは、広義に捉え、主張を同じくする集団としての宗派およびその意識であると定義している。なお、本稿では、便宜上、ブラザレンという用語を、結果としての組織 (宗派) として述べる場合は、「キリスト (諸) 集会」、その過程の運動とみる場合は、「ブラザレン運動」と意識的に区分けしているが、本論の性質上、原資料や他者の書物からの引用、参照箇所等も多く、その文脈に従って混在している場合もある。

1 ブラザレン運動の始原

ブラザレン運動の研究のなかでもこれらを正確に史実に沿って総合的に分析しているのは、F. Roy Coad (2001), *A History of the Brethren Movement*; Nathan Delynn Smith (1986), *Roots, Renewal and the Brethren*; Tim Grass (2006) *Gathering to His Name*; Edmund Hamer Broadbent, *The Pilgrim Church*、などがある。それらの諸文献を手がかりに、その発祥の経緯を詳細に追っていきたい。また、ブラザレンの原資料を提供している“Plymouth Brethren” Archive 公式サイト (<https://www.brethrenarchive.org/>)、及び The Brethren Archivists and Historians Network (BAHN) (<http://www.brethrenhistory.org/History.htm>) は貴重な歴史資料を保存、提供しているサイトであるので本稿でもそこから参照している。また国内では川向がインターネット上で (<https://notesonbrethren.wordpress.com/>) 議論をしているので参照されたい。

その始原を何に、どこに求めるかというのは歴史全般においても難しいが、ブラザレン運動の場合はとりわけ困難である。そもそもブラザレン運動自体が特定の一人の人物の組織的・意図的な思想によって確立したものでないからである。その困難さを伴うことを前提にして、その集会形式を重視して始原を辿ると、厳密には、1827-28年にアイルランドのダブリンでの「集まり」に起因しているとされるのが通説である。その「集まり」とは、国教会の役職者であったエドワード・ウィルソン (Edward Wilson) の私宅で平日の夜に行われていた (Coad 2001: 29)。メンバーとしては、主に国教会の聖職者、神学の関係者たちであった。そこには、後にその原点ともなるグローヴス (Anthony Norris Groves) やダービがいた。その集まりの目的は、当初、国教会からの分離運動的要素やその分派的要素ではなく、聖書を中心とした神学的議論を交わし、祈り、そして交わりの時をもつというものであった。それが次第に、話題が国教会の刷新、霊的覚醒ということがクローズアップされるようになり、徐々にその「集い」が定期化され、慣習化されていった。そしてある時に、その「集い」において、「パンと杯」を共有するいわゆる「聖餐式」も行われるようになった (Coad 2001; Grass 2006)。それが今日の諸集会の原型である「パン裂き」集会であるとされている⁽⁶⁾。

その後、私宅を開放していたウィルソンがイングランドに転居したことに伴い、フィツウィリアム (Fitzwilliam Square) のハチンソン・シング男爵 (Sir Hutchinson Synge 3世) 宅に拠点を変更して、その一室で「聖餐式」を継続することになった (Coad 2001: 29)。その後、聖職者であり神学者であったダービが国教会から正式に離脱したことに伴い、国教会と分離することによって、この運動の正当性が聖書神学的に説明され、またその運動の性格が徐々に「分離派」として先鋭化し、結果的に国教会から独立したグループとしての群れ (教派性) の性質を帯びていくように変化していく (Smith 1986; Coad 2001; Grass 2006)。

初期のこの集まりに参加していたのが、聖職者、神学者ダービ、歯科医師グローヴスのほかに、弁護士ベレット（John Gifford Bellett）、医師クロウニン（Edward Cronin）、ハチンソン男爵（Francis Hutchinson Syngé III）らであったとされるが、草創期のメンバーは、いずれも当時はまだ若き30代前後であり、社会階層的には、聖職者、学者、医師、弁護士、貴族など高学歴な知識人であったことも特筆すべきであろう（Coad 2001：29-30）。

2 原点としての「フェイス・ミッションの父」グローヴス

以上のような始原として「集会」、あるいはブラザレン運動がはじまっていくが、神学者や歴史家は、その性質上、ブラザレン運動の起源を特定の人物や一定の組織的な神学に還元するのは難しいとする。しかし敢えて、それを特定化させるなら、その一人として、「フェイス・ミッション⁽⁷⁾（faith missions）」のアンソニー・ノリス・グローヴス（Anthony Norris Groves, 1795-1853）を挙げる研究者は少なくない。彼こそがこの運動の思想的な原点であり、起源であるとされるのである（Smith 1986; Coad 2001; Grass 2006; Broadbent 1931）。

グローヴスは、年齢的にもダービやミュラーよりも上であり、初期の「集い」をリードした。特にフェイス・ミッションに基づいて聖書に立ち返る信仰の精神性やパッション（霊性）においてブラザレン運動のルーツはここにあるといえる。彼についての記録は、先に挙げた文献等にも一部あるが、その全貌は Robert Bernard Dann, *Father of Faith Missions: The Life and Times of Anthony Norris Groves*, Authentic Media（2009）に詳細が記されているのでそれを参照されたい。

Dann（2009）によると、グローヴスは、信仰に燃え、海外宣教の志を持ち、その準備のため、ダブリンのトリニティ大学（Trinity College）で神学を学んでいた。しかし、国教会の聖職者として叙階されることがかなわずに、また教会宣教会（Church Mission Society）からも聖職者として派遣されることが

なかった。そのことなどから既存の国教会やその組織自体の権威に対して疑問をもつようになる。後に彼は、聖書研究に没頭し、組織にたよらず神への信頼をモットーとしたフェイス・ミッション (faith missions) を立ち上げて海外宣教を実施することになるが、その名称は意味深い。なぜなら国教会系の Church Mission Society から派遣を拒否され “faith missions” によって宣教を志したのであり、“faith” と “church” という対比として考えると、“faith missions” の “faith” という理念こそが、後のブラザレン運動の精神性 (霊性) そのものを象徴しているからである。

グローヴスは、聖職者になることができなかつたこと等から既存の国教会に疑問をもつようになったが、そこから更に聖職者 (牧師) 制度の在り方、聖餐の在り方を聖書の文字通りの記述に根拠を求めて独自に探求していくようになる。彼は、大学や教会に所属する聖職者や神学者のような思索方法ではなく、聖書に基づいて単純に生きることに活路を見出す。そして海外宣教の志を抑えきれずに、独立型の自給伝道者という方法で、その道を模索するようになる。こうして次第に彼は既存の国教会それ自体から身を引いていくことになる。1825年には社会の不正義への対応として信仰による解決を目指すことを主張した *Christian Devotedness* (「キリスト者の熱心」) というパンフレットを出版したが、こうした彼の既存の組織に頼らないミッションと信仰的態度がそのままブラザレン運動のシンボルとして共鳴され、それが次第に共有されていく (Coad 2001: 17)。彼は、1827年頃、ダブリンのトリニティ大学で神学を学んでいたが、先に示した通り、エドワード・ウィルソン宅での集会にすでにレギュラー・メンバーとして参加していたようである。そのなかでも若き国教会の聖職者ダービより年齢的にも5つ年上で、社会経験もあり、初期の「集い」を事実上リードしていた (Coad 2001: 21-24)。

ところが実際、グローヴス自身は、その後、海外宣教へ出かけるようになったため、英国の初期ブラザレン運動そのものの形成には直接的に関与している

わけではない。当初からの念願がかなって1829年に独立型自給伝道者として、初期のブラザレン運動のメンバーたちが提供するヨットでロシアにわたり、そしてロシア経由で バクダッド（現在のイラク首都）に入り、そこで海外宣教に生涯をかけることになる。この点で、グローヴスは、イスラム圏宣教の先駆者とも言われている（Dann 2009; Coad 2001 : 21-24; Grass 2006 : 12-29）

グローヴスの宣教に同伴するのが後にミュラーの生涯の盟友となる当時24才の若き青年ヘンリー・クレイク（Henry Craik, 1805-1866）である。この伝道旅行は洪水など自然災害の過酷な生活を強いられ、グローヴスは、結果的にそこで妻と娘も失うことになった。1852年に彼自身も病気のため英国に帰国するまでインド、バクダッドでの海外宣教を続け、そして1853年に死去した（Dann 2009）。

一方で、ジョージ・ミュラーは1830年にこのグローヴスの妹（Mary Groves, 1797-1870）と結婚することになった。その意味で、生涯においてもっとも重要なパートナーとなる二人、つまり盟友クレイクと、そして妻メアリーとの接点は、いずれもこの海外宣教を心掛けた「フェイス・ミッションの父」グローヴスを起点としていることは、不思議な邂逅である。つまりドイツ人のミュラーが、それまで無関係であったはずのイギリスにおけるブラザレン運動と必然的に結び合わされていったのは他でもないグローヴスであったと言っても過言ではない（Dann 2009; Coad 2001）。

ちなみに、このグローヴス自身はイスラム圏の海外宣教の先覚者としても歴史に名を残すことになったが、宣教の成果という意味では、ことごとく「失敗」して、目に見える結果を挙げたわけではなかったようである（Dann 2009）。自らの評価においても自分の海外宣教は失敗だったと自覚していたようである。彼の宣教が成功か失敗かは別として、グローヴスの救霊への想いと宣教にかけた「情熱」こそが、後にブラザレン運動の海外宣教の先覚者となり、多くの後進たちの海外宣教に火をつけ、またバクダッド伝道の同伴者クレイク

に、そして後に義理の弟となったミュラーにそのまま継承された。それがやがて、キリスト諸集会の形成、その後の海外宣教の先駆となり、世界にキリスト諸集会がつくられる礎となった。また1836年に設立されたミュラーの孤児院事業、国際福音宣教会（OMF）の前身となったハドソン・テイラー（Hudson Taylor）の中国内陸伝道（China Inland Mission）、日本でも石井十次の孤児院事業等に影響を与えていくのである。しかしこのことが判明するのは、グローヴス死後のことであり、生前は「失敗」として受けとめていたように、これらの実を知る余地はなかったのである（Dann 2009; Broadbent 1931: 373-398）。

3 プリマスでの展開と発展

さて、その後、アイルランド（当事はイギリスの一部）のダブリンではじまったキリスト諸集会は、1830年代初頭にはイギリスの南西部の港湾都市プリマスで同様に国教会等から離脱した聖職者や信徒たちの間でも盛んになっていく。それゆえに、ブラザレンが「メノナイト・ブラザレン」と区別するために「プリマス・ブラザレン」と呼ばれるのは、プリマスが発祥の地というより、そこで隆盛していったことによる。このとき卓越的なリーダーシップを発揮するのは先述した神学者ネルソン・ダービであり、その影響でこの運動は、体系化され、組織化され、急速に拡大していく。ちなみにダービは、多くの注解書、神学書、説教集、賛美歌を残したが、新旧訳聖書も一人で英訳し、それがダービ訳聖書として今日でも古典として用いられている（Smith 1986; Coad 2001; Grass 2006）。

ところで、先述した通り、当初のブラザレン運動は、国教会の離脱、新しい教派形成という志向が当初から根強くあったわけではなく、むしろ国教会内における聖書（原点）への回帰、世俗化した教会の刷新運動、いわゆるリバイバル的な信仰への改革運動という含意が主軸であった。このあたりについて歴史

学者が指摘する特徴によれば、使徒時代の教会へ立ち返ることを主張して、一つの教派に属することを忌避することが特徴である。そのうえで、内面的回心の重視、個人の信仰の強調、聖書中心主義、十字架の強調という点ではプロテスタントの福音主義的伝統そのものを継承したのであるが、それに加えて、ブラザレン運動は、万人祭司の徹底（司祭や牧師と呼ばれる聖職者をもたない信徒による運営）、毎週の聖餐式（パン裂き集会）の実施、ディスペンセーション主義に基づく逼迫した再臨待望などの終末観を強調、海外含めて福音宣教への熱心さ、などの神学的、信仰的な傾向が顕著にみられる。なお、ブラザレンの呼称は、聖職者ではなく「兄弟たち」（信徒）による教会運営に由来するのである。また特に、このディスペンセーション主義に基づく教理は、後述するがダービの影響によるものである。現代神学的カテゴリーでは保守的福音派のプロテスタントの一つというカテゴリーとなるが、当人たちは、「ブラザレン」という一教派であることを頑なに否定しているのも特徴である（Dowley 1977; Broadbent 1931 : 373-398）。

4 ブラザレンの神学教理的特徴としてのディスペンセーション主義

ブラザレン運動を特徴づけるものとして、今日、神学的にしばしば指摘されるのは、ディスペンセーション主義（Dispensationalism）という神学体系である。ただこの点について、後述するが「オープン派」においては、すべての諸集会において普遍的教理ではないとされており、それ自体にも必ずしも統一した見解があるわけではなく、共有するような体系的な神学的教義ではないともいえる。多くの優れた注解書などを残し、ブラザレンのなかでは卓越した著名な神学者（新約聖書学）である F. F. ブルースは、それを擁護するどころか、そもそもその体系自体を受け入れなかったと言われている（Bruce 1940 : 203-214）。また、ミュラー自身も、聖書自体の詳細な釈義を数多く残しているが、ディスペンセーション主義に関しての議論や発言を積極的にしていない。

ただし、そのキリスト集会のなかのエートスとして、ディスペンセイション主義に基づく切迫した再臨思想、ユダヤ人とキリスト教を分断した聖書解釈などは色濃く今日においてもその影響は残っており、さらに他の福音派にも影響を与えている⁽⁸⁾。

ところでディスペンセイション主義自体は、一般的用語ではなく、神学的にもあまり中心的に顧みられなかった概念であるが、近年いわゆる「福音派」の終末論の根拠として浮上して注目されてきた。それは論争点にもなっているようであるが、その始原を探求するなかでダービの存在がクローズアップされてきた。本稿の枠を超えるので、その神学的争点にはここでは立ち入らないが、ディスペンセイション主義というものについて必要最小限に整理しておきたい。

まずディスペンセイションとは、「経綸」とも訳されるが、その特徴として、その定義自体は、論者によって幅があり、一定の定義は難しい。ダービの主張を広めることに貢献した会衆派の牧師スコフィールド (Cyrus Ingerson Scofield, 1843-1921) の定義によると、「啓示された特別な神のみこころに対して、人が従順であるかどうかを試された一定期間である。聖書においては、そのような七つのディスペンセイションが区別されている」(*Scofield Reference Bible*, New York: Oxford, 1909:5) とされている。今日では必ずしも7つの区分に限定することなく、その区分方法にも諸種の説がある。

現在のディスペンセイション主義の擁護者である神学者のライリー (Charles Ryrie) の標準的テキストともなっている Ryrie, Charles, C. (1966) *Dispensationalism*, Moody Bible Institute によれば、「1) イスラエルと教会との一貫した区別を認めること、2) 字義的解釈の原則を通常の用法として一貫して用いること、3) 基本的で主要な神の目的概念を、ただ人類の救いだけとせず、むしろ神ご自身の栄光であるとする事」(Ryrie 1966=2018 前田訳:49) となっているが、これが今日のファンダメンタリストの聖書解釈方法の基となっているともいえる。

II ミュラーとブラザレン運動とのかかわり

ブラザレン運動の諸相について述べてきたが、それではジョージ・ミュラーとブラザレン運動とのかかわりはどのような経緯があったのであろうか。以下ではミュラーとブラザレン運動について議論していきたい。その際、ミュラー自身は生涯においてブラザレン運動にかかわることになるので、ここでは、そこにかかわり始める1829年から分裂が確定的となる1848年にいたる経緯にのみ焦点をあてることにする。ちなみにミュラーは1832年にベテスダ集会の開拓伝道着手、1836年に孤児院創設、1849年に孤児院移転（大規模化）をしているので、ちょうど孤児事業の着想、開始、展開と、密接にかかわる時期と重なっていることになる。

1 独立伝道者への転身

ミュラーは、先の筆者の論文（木原 2018）で詳細を明らかにしたように、プロシアで生まれ、ハレ大学で神学を学び、自明のように「職業としての牧師」を志していたが、そこでフランクからの敬虔主義の影響を受けて霊的覚醒を経験し、そこでキリスト者としてのいわゆる「新生」体験をしたという。そして大学は卒業したものの敢えてルター派教会の牧師（聖職者）となることを固辞して、キリストにある志をもって宣教師としてイギリスにやってきていた。そして「ロンドン・ユダヤ人宣教協会」（London Society for Promoting Christianity Amongst the Jews）で派遣宣教師として働くことになった。なぜミュラーがユダヤ人伝道を志したのかという点は、実はミュラー自身の言明、先行研究からは明らかではない。このミュラーのユダヤ人伝道の働きは彼自身の健康状態のため中断を余儀なくされる。そして転地療養のため、1829年に南西部の海辺の町ティンマス（Teignmouth）で療養していたが、そこで先述した生涯の盟友となるクレイク（Henry Craik）に出会う（Pierson, 1899）。

このクレイクこそ、先に述べた通り、ブラザレン運動の原点となるグローヴスのバクダッド伝道旅行に同行した人物である。1829年のティンマスでのクレイクとの出会いを経て、ミュラーは英国内で組織に頼らない伝道活動に興味を抱くようになっていく。ここにはフランケラから受け継いだ敬虔主義と相通じるものを感じたゆえであろう。時折しも、彼は体調を崩していたこと、そして派遣団体であるロンドン・ユダヤ人宣教協会の組織の在り方に疑問を呈しはじめていた時期と重なり、結果的にこの団体から離反することになる。組織や団体に頼らず信仰のみを頼りとするブラザレン運動の宣教・伝道方式に共鳴するうちに、自らも独自の開拓伝道活動の道を模索するようになっていく。その結果、派遣団体であるロンドン・ユダヤ人宣教協会を脱退することになった。そしてあらゆる組織から自由になり、またいずれの団体にも従属しない独立型の伝道者の道を選んでいくことになる (Pierson 1899; Smith 1986; Grass 2006)。

2 ベテスダ集会におけるクレイクとミュラー

ミュラーは、1829年に療養のため訪問していたティンマスにそのまま滞在することとなり、そこで出会った妻と翌年1830年に結婚する。先述した通り、妻は、年齢はミュラーよりも8歳上で、ブラザレン運動の元祖的人物、バクダットの宣教師のアンソニー・ノリス・グローヴスの妹メアリー・グローヴス (Mary Groves, 1797-1870) である。二人からは娘のリディア (Lydia) が生まれるが、後にジェームズ・ライト (James Wright) と結婚し、この二人が、ブラザレン運動の継承者となり、ミュラー死後は、責任者として孤児事業を引き継ぐことになる (Pierson 1899; Müller 2011)。

メアリーとの結婚で、ブラザレン運動の原点とされた人物を義理の兄にもったことで、必然的にこの運動とのかかわりを一層強めることとなり、ミュラー自身もこの運動に献身することになる。特に義理の兄グローヴスから継承したのは、組織自体ではなく、神そのものにより頼む生き方、すなわちフェイス・

ミッションの精神であり、後の孤児院形成にこれがそのまま引き継がれていくことになるのである。

そしてまた、グローヴスのバクダット伝道の同伴者であったクレイクとのかわりの中で、ブラザレン運動の中核に入っていくことになる。その意味では、義兄グローヴスこそが、ミュラーを期せずしてブラザレン運動に結びつけるキーパーソンであったと言える。先述したようにグローヴスは、自らの宣教が「失敗」に終わったと思っていたようであるが、その後、妹のメアリー、義弟ミュラー、同伴者クレイクを通して、ブラザレン運動に計り知れない影響を与えていくことになるのである (Pierson 1899; Müller 2011)。

さて、クレイクはブラザレン史ではあまり着目されることの少ない人物であるが、年齢もミュラーと同じで、二人は生涯にわたって親友であり、互いの支え手であり、すべての事業の同志となる。特にベテスダ集会の説教においては、ミュラー自身も認める通り、信徒の益のためには自分よりも説得力のあるメッセージを語る賜物があり、そこで説教者として、牧会者として、中心的な働きをしていた。二人はその意味において互いの賜物を認め合い、ミュラーがキリスト集会の人脈を形成する意味でクレイクは極めて重要な役割を果たした人物である (木原 2018)。

1832年にミュラーはクレイクとともに、ギデオン集会 (Gideon Chapel) とベテスダ集会 (Bethesda Chapel) の開拓伝道をはじめた。先述したようにブラザレン運動自体はダブリンではじまり、プリマスで急成長を遂げ、そして新たに未開拓であったブリストルにおいて開拓伝道が着手されたのである。ギデオン集会のほうは、諸事情があって1840年に閉鎖しているのも、実際はベテスダ集会のみにおいて二人は共同して働くことになる。ベテスダ集会はミュラー生前時には1200人にのぼる信徒数となり、更にそこから10の地域集会所が開拓して建てられるほど成長していく。ミュラーの役割は、一般の教会であれば、いわゆる「牧師」ということになるが、厳密にキリスト集会的に言うならば、一

人の「兄弟」として牧会に献身するということになる。⁽⁹⁾ ハレ大学神学部を卒業してルーテル派では牧師となることができたが、「職業牧師」であることを辞して、牧会者として集会を支えたのである。具体的には、牧師のように教会から定額の給与を受けることを放棄している。生活の支えは、毎週の席上献金のみを支えとして、旧約聖書の預言者エリヤが宮廷に仕えることなく、カラスに食事をもってきてもらうというエピソードにあるごとく、神にのみに支えられるというフェイス・ミッションを生涯、実践、実行したのである (Smith 1986; Coad 2001; Grass 2006; 木原 2018)。

集会の礼拝の特徴としては、今日の諸集会と同じく、使徒の時代の原始教会を模して、毎週のパン裂き（聖餐式）を中心とした信徒の自由祈禱による礼拝である。説教は、多くの集会のように男性（兄弟）であれば基本的に誰もが公で語るが、ベテスダ集会の場合は、ゲストスピーカーを除いてミュラーとクレイクが主に説教を行ったようである。こうして、ミュラーはクレイクとともに生涯このベテスダ集会の形成を担うことになる。

このベテスダ集会こそがミュラーとその孤児事業を生涯にわたって支える母体となっただけでなく、後に属に「オープン・ブラザレン」（「開かれた集会」）と言われるいわゆる今日においても世界的広がりをもつ、「諸集会」の群れを形成する流れの拠点になるのである。ベテスダ集会はあくまで地域にある独立した一つの集会（教会）ではあるが、一つの宗派・教派としてセクトであることを拒否することが特徴である。

ミュラーとクレイクは1834年に聖書知識普及協会（Scriptural Knowledge Institute）という団体を集会の外に結成する。これは、聖書とその関連知識の普及・教育を目的とするもので、これが後に国内外の宣教を支える財政的基盤になった。またそれはミュラーの孤児院事業の財政的基盤となるものである。後には世界のキリスト諸集会、そして教派を超えて、この働きは支えられていくことになる。この聖書知識普及協会がミュラーの孤児事業の躍進と規模の拡

大にも起因することになる。

III ブラザレン運動の挫折と分裂

このようなブラザレン運動は、1830年頃からはじまって、英国およびアイルランドの国教会からの多くの離反者を受け入れることで急速に拡大していくことになるが、イングランドだけでも1900年代初頭に1000を超える集会（教会）となるが、現在は減少傾向にあり、500近くとされる（Grass 2006 : 518）。

しかし、その後10数年で修繕不能なほどの破局的な分裂を生み出すことになる。その結果、当時者はそのような呼称は使用しないが、ミュラーらの“Independent Brethren”（“Open Brethren”）「ブリストル派」と、ダービの主導する“Connexial Brethren”（“Exclusive Brethren”）「プリマス派」に二分されて行くことになる。

結論を先取りするなら、この分裂の悲劇と挫折が、ブラザレン運動に及ぼした負の遺産は計り知れないほど大きい。一方で、ミュラーおよび孤児院事業の形成と発展には逆説的ではあるが、その後の経緯の詳細を見るならば、むしろプラスの影響を及ぼしたことは否定できない。もしミュラーがダービらから「絶交」されることなく、排他的なブラザレンのグループにそのまま留まっていたならばミュラーの孤児事業は、その後、拡大して飛躍的に発展していくことはなかったであろう。なぜなら孤児事業というような社会的な事業は、一教派の枠内でおさまっていれば事業展開は行き詰まってしまうからである。

この章では、この分裂（絶交）の経緯を正確に跡付けつつ、極めてセンステイブな内容ではあるので、できるだけ価値判断や結論を急がず、主に、資料（史料）をもとに分析していきたい。その際、“Plymouth Brethren” Archive および The Brethren Archivists and Historians Network（以下、BAHN）は、ブラザレン関連の個人の書簡、手紙などを幅広く保存、公開しているので

原資料として参照している。また、マンチェスター大学（The University of Manchester）の図書館が、“Christian Brethren Archive”として原資料を残しているのを参照されたい。ここでは、それらに残された資料を中心に議論していきたい。またそれらを補足するべく、Coad (2001)、Smith (1986)、Grass (2006)らが、分析・解釈を施しているのをそれらも併せて参照していきたい。

ただし、過去の歴史的な話であっても当事者間の分裂の経緯を扱うに際して、「中立」を装うことはできても、実際に「分裂」を中立の立場で議論するのは不可能に近いといってもいい。むろん史資料から能うる限り、その解釈は中立を期したいが、ここでは、筆者の立場を明らかにしておく、本稿の主題であるジョージ・ミュラーの当時の状況と立場と角度からこの分裂の経緯を扱っていることを予め断っておきたい。

1 ダービとニュートンの衝突

分裂の始まりは、1840年代にプリマスのエブリントン集会（Ebrington Street）のニュートン（Benjamin Wills Newton, 1807-99）とダービとの間ではじまった詩篇6篇のメシアの人性、神性にかかわる聖書解釈上の問題に起因するというのが通説である。ダービと並んで当時リーダー格であったニュートンは、初期の頃からプリマスの集会で教理面において卓越的な指導力を発揮していた。この論争は、当初は、同じく指導的立場にあったハリス（Harris）らの和解に基づく仲介もあって、二人の間で書簡を通じて穏便に解決をみる様相であった（Cord 2001: 138-143）。このあたりの経緯は、ブラザレン研究者のGrass (2006)、Cord (2001)、らの見解によると、ダービの妥協を許さない教会政治的態度が、神学論争を超えた修復不能な分裂に陥らせたのではないかという解釈、ダービ研究の側（Weremchuk 1992; Sibthorpe 1903）からは、むしろ真理の徹底的な探求の必然としての分離という理解であり、現代でも一

⁽¹⁰⁾
致点はない。

その後の経緯は概ね以下のようなものである。ダービ側の強い意向で、1845年4月にあたかも「公開裁判」のような形で、13人の証人の前でニュートンはダービと対峙することになった。ニュートンははじめから「罪人」と見なされ、あたかも異端審問か公開裁判で訴えられて糾弾するような屈辱的な「不公平な」(unequal) 尋問形式そのものに不満であったが、敢えてその場に出て弁論をしようとしたが、結果的にその場で「感情的になり」(lost his self-control)、この論争が複雑化し、再燃してしまうことになってしまった (Coad 2001: 142)。コードの解釈によれば、この時のダービについて、次のようにまとめている。「この一連の騒ぎに於いて、ダービは、不誠実な戦略 (disingenuous tactics) を取り続けたと言える。彼は意図的にニュートンがこだわっていた教理的な違いそのものを焦点化せず、これらを矮小化させ、正当な議論それ自体を妨げた。むしろ、ダービは、ニュートンの態度・行動に焦点をあて、論点にすり替えた。それはニュートンがダービの教義 (筆者注: ディスペンセーション主義的理解) がクリスチャンの根本教理として壊滅的であるとしていたのだが、それこそがニュートン自身の主張の不安定性に起因するとしたのである」(Coad 2001: 142) つまり、そもそも詩篇の聖書解釈の問題に起因したはずの議論が、問題の本質をずらされ、ニュートンの個人の資質や行動への論理のすり替えがなされたことで、ことが深刻化していったのである。(Coad 2001: 138-153)

2 分裂の経緯と真相

キリスト教史を専門として、ブラザレン史の権威である Tim Grass (2006) *Gathering to His Name* にこのあたりの詳細な経緯が時系列に記されているので、それに基づいて分析していきたい。

グラスによると、1845年の夏の間、ダービは、ニュートンの教会観が聖職者中心主義であり、ニュートンのブラザレン (集会) への関与はキリスト諸集会

における聖霊の働きを奪うものであると結論づけた (Grass 2006 : 74)。そして1845年10月18日にロンドンからプリマスに戻ったダービは、「謙遜と祈り」(humiliation and prayer) の特別な会議を開催し、ロンドンにいたニュートンをそこに呼び出そうとしたが、これをニュートンが拒否した。これを受けて、ダービはプリマスのエブリントン集会在がキリスト諸集会全体として満たすべき原則に違反しており、エブリントン集会との「絶交」を宣言する。1845年12月5日から8日にかけて指導的な立場であった人々が集まり、この問題の当事者たちの会談を召集すべく集まったが、その目論見も結局失敗に終わった (Grass 2006 : 75)。

そして、この問題の動揺は、ニュートンへの支持 (ダービへの反論) 含めてブラザレン運動全体に拡大していく。1846年1月11日には、ロンドンのローストーン (Rawstorne) 集会で、コングレントン卿 (Sir Congleton=John Vesey Parnell, 2nd Baron Congleton) (集会の初期リーダーの一人) は、ダービを擁護する同じく集会の初期リーダーの一人ウィグラム (Wigram) に対して、むしろダービのほうが、キリスト諸集会全体の分離 (schism) を起こそうとしていると責めたが、大方は静観しており、集会全体として議論することは避けることになった (Grass 2006 : 75-76)。ロンドンでも、この論争が問題となり、その真相を明らかにしようとする集まりが持たれた。チャップマン他、当時の主だったブラザレン運動のリーダーたちはこの問題に心痛め、何度か、特別な会議を開催して修復を試みたがいずれも徒労に終わり、結果的に、ダービの指導的立場とブラザレン運動の主導を確固たるものとしていった。

最初は詩篇6篇の解釈をめぐり、キリスト (メシア) の受苦をとりあげるキリストの人性についての議論が、ダービによって諸集会全体の問題に波及し、こうして最終結末を迎えることになってしまった (Coad 2001 : 148)。ニュートンは1847年12月8日に「追放」されるようにしてプリマスを去った。同年12月13日にエブリントン (Ebrington Street) 集会に残ったリーダーたちも、ニ

ニュートンと共に彼らが共有していた「誤り」(erroneous teaching) を捨てることを宣言し、この集会から離れることを主張した。当時、エブリントン集会は700を超える信者がいたが、これらの経緯を受けて激減した。なお、ニュートン自身はブラザレン運動を離れ、ロンドンのベイウォーター (Baywater) にある教会で1872年まで牧会と預言研究を担うことになった。キリスト集会全体の文脈で言えば、初期のブラザレン運動のリーダーであったニュートンの「追放」が遂行されたのである (Grass 2006 : 79)。

IV ブラザレン運動分裂の余波とベテスダ集会 (ミュラー)

これまでの、この論争とは一定の距離を置き、特に分裂には中立を保っていたブリストルのベテスダ集会のミュラーとクレイクは、この論争には直接関与してこなかったが、思わぬところからその余波がミュラー自身のもとにもやってくることになる。実は、それが、ミュラー自身の生涯の転機となり、かつ、ブラザレン運動のなかでも、先のニューマンの「追放劇」以上に決定的で深刻なダメージと影響を後世に残すことになる。

1 ベテスダ集会への非難

先述したように1847年末にニュートンが「追放」されて、それでことは沈静化するかと思われたが、この問題はこれで終わらなかつた。それどころか更にその影響を拡大していく。そして期せずしてミュラーやクレイクにもそれは直接的に及ぶことになる。

それは、1848年4月にミュラーらの属するブリストルのベテスダ集会で聖餐式 (パン裂き集会) にニュートンの考えを支持していたウッドフォール (Captain Woodfall) が客人として参列したことに端を発して、この問題が再燃することになった (Neatyby 1901 : 156-158)。ベテスダ集会とは、先述し

た通り、ミュラーが開拓し、クレイクとともに牧会しているブリストルにある集会の一つである (Grass 2006; Coad 2001)。

そんな折、ミュラーが、ベテスタ集会にダービを説教者として招聘しようとした。ところがダービはニュートン支持者の一人ウッドフォールを受け入れたことが不満で、そのようなベテスタ集会にはいくことができないと固辞したのである。このことで問題が一層複雑化する。ミュラーとクレイクは、このことで問題がさらに再燃し、深刻化し、諸集会全体が再び混乱を繰り返すことを懸念して穏便な解決と沈静化をはかった (Grass 2006 : 80)。ブラザレン運動の指導者の一人で、当時、尊敬されていた伝道者チャップマンですら、このようなダービのあまりに過激で性急な言動に対して困惑していたことから、この分裂をめぐるダービの立ち位置がみえてくる (Grass 2006 : 80)。なお、バース (Bath) で1848年5月10日、ニュートンの考えに反対する指導者たちが集まり、この問題を再度討議したが、それでも結論には至らなかった (Grass 2006 : 80)。

同年の6月にはダービの有力な支持者の一人であった信徒が、ベテスタ集会を離脱するなど、ベテスタ集会内部においても動揺と問題が出現しはじめていた。ベテスタ集会は1848年6月29日に総会を開催し、「10人の連名による手紙」(“Letter of the Ten”)として知られる文書を出した (Grass 2006 : 80)。この手紙はアーカイヴとして全文が残っているのだが、これは、ブラザレン運動史においては重要な歴史資料である。全文は、Coad (2001 : 297-300) の著作巻末にも掲載されている

手紙の署名は、10名のベテスタ集会の信徒名が記されている。署名のファースト・オーサーにはクレイク、セカンドにはミュラーが挙がっていることから、ベテスタ集会での二人の立場も推察できる。この「手紙」のなかで、ニュートンの教義問題それ自体は聖書の真理に照らして容認しないとすもの、これ以上の詳細な調査を独自に実施しないこと、そしてこの論争のどちらの側にも

つかないこととした。そして、仮にニュートンが牧会した集会に所属した信徒だからといって、その人が健全でない信仰を持っていない限り、そのことでパン裂き（聖餐式）への参加を拒否することは今後もしないことなどが明記されていた（“Letter of the Ten”）。概ね、他の地域の諸集会はこのミュラーらのベテスダ集会の立場に賛同したが、ダービは、このような態度をよしとせず、ベテスダ集会を非難しはじめた（Grass 2006; Coad 2001）。

ダービの反論は以下の通りである。1848年8月26日にダービは、「ベテスダ回覧文書」（“Bethesda Circular”）と呼ばれる回覧されるための公開文書を公表した（Grass, 2006: 80）。⁽¹¹⁾「回覧」という手法は使徒パウロの書簡のような権威をもつイメージであるが、そのなかで、ニュートン支持者をパン裂き（聖餐式）に迎えて交わるようなベテスダ集会はニュートンの「罪」を容認しており、それと同罪であるとクレイクやミュラーらのベテスダ集会を批判した。また、ベテスダ集会がニュートンに関する調査を拒否したということは、ベテスダ集会がニュートンと同じ過ちに陥っていると断罪したのである（Grass 2006: 80）。そして、それゆえに、ダービはベテスダ集会を「異端的」として、諸集会から排除（絶交）したのである。つまりベテスダ集会からの信徒をブラザレンの諸集会全体は聖餐式に受け入れることも、ベテスダ集会で聖餐式に参加した個人を受け入れることも拒否すべきであると主張したのである（Grass 2006; Coad 2001）。

このとき、ダービが主張した各地域のキリスト集会全体の統一^一的^一連^一合^一（connexon）と「誰の目にも見える形での一致」（visible universal unity）（Grass 2006: 80）という概念こそが、後に諸集会全体に影響を与えることになり、またこれがブラザレンのいわゆる「セクト化」の布石となった。つまり、この一致原則こそが連合的集会“Connexial” Brethrenの原点になったと指摘されている。実際、これが今日にいたるまで、ダービとそのグループの原則となっている。これと対比して、ミュラーらは、各集会はそれぞれの地域にあ

って独立して、その責任を各地域集会在神に委ねられていることを強調するようになる。これは会衆派が強調する地域教会独立の原則と同じである。

当時、イギリス全体のキリスト諸集会在内外のなかでも「偉大な信仰者」であり、特に孤児事業において敬意を表されているミュラーやベテスダ集会在への同調はあったものの、結果的に多くの諸集会在がダービの主張に従うことになった(従わざるを得なかった)。それほど、ダービの神学的な卓越的なカリスマ性があったともいえる。とはいえ、ミュラーの孤児院運営支援の関係で、多くの諸集会在がベテスダ集会在との支援関係は保持していたため、この問題に対する説明が諸集会在全体の悩ましい課題となった(Grass 2006 : 81-3)。

2 ベテスダ集会在との「絶交」と“Exclusive Brethren”の確立

ダービらによるベテスダ集会在への非難はこれで終わらなかった。さらにベテスダ集会在でのミュラーとともに共同で牧会していたクレイクへの異端疑惑が諸集会在のダービ支持者の中心人物であったウィグラム (Wigram) より提起された。それはその当時よりすでに10年以上も前の1835年にクレイクが *Pastoral Letters* という雑誌で公刊していた論文・諸説への批判であった。クレイクの弁明にもかかわらず、ウィグラムは、批判の手を緩めず、誤った教えに関する責任はその集会在の構成員たる集会在内にもあるとして、ベテスダ集会在全体を批判したのである (Grass 2006 : 81)。

そのような環境の中、さらに追い打ちをかけるようにベテスダ集会在が直接に非難される「事件」が起こった。それは「追放」されたニュートンの従妹であった女性トウムリン (Amy Toumlin) が1848年11月に客人としてベテスダ集会在に来訪してパン裂き集会在 (聖餐式) に参加したことによる (Grass 2006 : 78 ; 81)。彼女は、事の発端となったニュートンの詩篇 6 篇の説教のノートを作成したニュートンの従妹である。ミュラーとクレイクのベテスダ集会在は、彼女の聖書理解と信仰を確認したが、彼女のキリスト者としての信仰はあくまで

健全であり、穏健なものであることが確認されたために、聖餐式に受け入れたのである (Grass 2006: 81-2)。ところが、このことがダービラの知ることとなり問題が複雑化する。

結果的にダービラはこれをもとにベテスダ集会への非難をさらに強めることになった。そのため、1848年11月27日から12月11日にかけて、ベテスダ集会では、この対応のために総会が都合7回も開かれ、その結果、少なくとも、ニュートン自身の考えを一時的に支持したり保持したりするものは受け入れないということを決議した (Grass 2006: 82)。ダービはこの対応を承認し、更に彼らが先に公開した“Letter of the Ten”の撤回の声明を公表し、公刊することを望んだが、ベテスダ集会はそれを拒否した (Grass 2006; Coad 2001)⁽¹²⁾。

ダービから、これらの一連の「騒動」で徹底的に非難されたミュラーであったが、そのことで対立を煽る姿勢は一切とらず、常にダービに対して敬意を示し続け、ミュラーのほうからは交流を断とうとはしなかったことも触れておかなければならない。筆者が管見する限りにおいて、遺された彼の手紙やその後の文章からミュラーやベテスダ集会に対する個人攻撃的批判に対して、事実の「弁明」「反証」はあっても反論としていわゆる個人的な「中傷」「攻撃」「非難」などの感情的暴露をみることはない (Pierson 1899; Müller 2011)。興味深いのは、このブラザレン運動の分裂騒動の翌年の1849年に孤児院を郊外に移転させ、大規模な施設を建設し孤児事業を本格化させている点である。

いずれにせよ、これらの経緯を経て、1848年に結果的に分裂は決定的となった。以後、今日にいたるまでこの分裂の溝は埋まることなくキリスト集会は、二つのグループに分裂を余儀なくされることとなった。一つは、「正統派」を自任するダービラのグループで、神学上、“Exclusive Brethren”や“Connexial Brethren”と言われ、その後、ダービの影響でディスペンセイション主義神学を体系立て、ファンダメンタリスト信仰の基礎をなしたともいわれている。ミュラーらのグループのみならず、他の教派を「宗派」扱いし、自分たちの

「群れ」(集会)とは一線を画し、これらとも交流することがなくなり、当事者がそれを望んでいたかは別として結果的に一つのブラザレンという「セクト」(派)となっていく。分裂当初はダービの卓越したカリスマ性もあってこのグループは拡大を続け、とくにスイス、フランスで広まり、急速に発展していったが、神学事典 *Oxford Dictionary* では「彼らの人数は20世紀後半には急に減少した」(Livingstone 2006=2013 木寺訳)とされているように、今日ではなお、キリスト教における保守的なグループ(集団)として現存するが、19世紀のその勢いはすでに失っている。

ただし、ダービが残した教理面においては、ディスペンセイション主義に基づく終末観、再臨、千年王国、空中携拳の教理は、アメリカの説教者のスコフィールドを経て、プロテスタント諸派とりわけ福音派に広く浸透し、大きな影響を及ぼしたと言われている。日本でもブランドらが明治期に宣教師として来日し、現在でも同信会系の諸集会を形成している。朝鮮半島への宣教に尽力した乗松雅休などの働きは日本キリスト教史全体においても有名である。

3 “Open Brethren”の確立と新しい展開

ダービの正統派からは異端視されて、1848年には事実上絶交されたミュラーらのグループは、ブラザレンがセクト化することを否定し、ただ単純に聖書に基づき、それぞれの地域の集会は、独立(independent)した群れとして展開していく。後に主流派であるダービの「排他的」(exclusive)と「統一連合的」(connexial)との対比で、神学上においては、“Open Brethren”や“Independent Brethren”と呼ばれるようになる。

イギリスやアイルランドでは、ブラザレンの主流派から批判され続け、自国での宣教の困難さを覚えていた。その蓄積されたエネルギーが、海外宣教へと向けられ、フェイス・ミッションの事業としてハドソン・テイラーの支援などにもみられるように世界宣教に励むようになった。当時のオープン・ブラザレ

ンの諸集会の信徒1%が海外宣教に出かけたというほど海外宣教への情熱とエネルギーがあった(Dowley 1977)。またジョージ・ミュラーの孤児院事業の活動にもみられるように教会外の社会的活動にも尽力する。海外宣教では、特にアフリカ、北米、中南米、オセアニア、アジア、と発展し、日本においても宣教師を通じて拡大されていくことになる (Dowley 1977; Pierson 1899; Müller 2011; 木原 2018)。

日本でも英国で分裂した二つの流れはそのまま受け継がれて、“Open Brethren”と“Exclusive Brethren”という二つのグループは交流することなく、並立して存在している。キリスト集会と、同信会系のキリスト集会の二つのグループとは交流はなく、あたかも違うグループとして群れをなしているし、当事者たちも互いの存在すら知らないというのが実情である。オープン・ブラザレンは、ミュラーのフェイス・ミッションの精神を受け継いで、海外宣教が活発でアルゼンチン、ザンビア、シンガポール、などではその国のプロテスタント諸派のなかでも数のうえでは上位に位置するなど今日まで拡大発展している (Dowley 1977)。

以上、本来教派の枠組みを超えた集まりであろうとしたにもかかわらず分裂があり、結果的に二つのグループに分かれていった過程を現存する原資料と歴史家の見解をもとに分析してきた。“Open Brethren”と呼ばれるグループは、ダービがその後大きな影響を与える“Exclusive Brethren”と呼ばれるグループから批判的に見られたことにより、その批判に対抗し、自分たちの在り様の正統性を示す必要に迫られることになった。そのエネルギーは、結果的にジョージ・ミュラー自身の集会観（それは地域ごとに独立しており、他の教会に対して開かれている）と彼の福祉事業と海外宣教への献身につながっていった。

そもそも、福祉事業というものは、社会福祉学の立場から言えば、決して一教派や一つのセクトに拘るような排他的なものからは、限られた受益者には益したとしても、決して本格的な継続的活動ができるはずはなく、ましてや時代

を超えるような大きな事業を、維持するのは不可能に近い。現代の社会福祉法であれば、第一種福祉事業に該当する措置施設である孤児事業（児童養護施設）ともなれば、その運営面でも多額な資金が必要であり、献金を多方面から集める必要があり、セクト化したような単立の教会だけで存続することはできない。仮にこの分裂がなく、ダービの主導のもとでその排他的なセクトに留まっていれば、ミュラーのなそうとした大規模な孤児事業経営や海外宣教はおよそ不可能であったとみることもできる。

結論

以上述べてきたように、ジョージ・ミュラーにとって、ブラザレン運動は彼の生涯において大きな影響をもっていた。いやむしろ表裏一体であったと言っても過言ではない。論じてきたように、ミュラーはまずブラザレンの原点であり「フェイス・ミッションの父」とされる義兄のグローヴスから、「ブラザレン魂」を文字通り継承した。これは組織や団体ではなく、目に見えない神にのみ頼るという精神であった。生涯にわたって、彼は、これを孤児院運営の指針として貫いた。その意味で、運動としてのブラザレンの精神は、ミュラーの孤児院事業を通して結実したともいえる。

一方で、ブラザレン運動のプラス面だけでなく、マイナス面についても本稿では、敢えて詳細を述べてきたが、それはミュラーへの逆説的な影響を述べるためであった。初期ブラザレン運動の勃興とそれに続く1848年に確定的となった分裂は結果的に当事者にとっては挫折と悲劇となったことは否定できない。当事者として、それに深く関与し、分裂の余波を直接受けたミュラーにとってもこの分裂は深い傷であったことは間違いないが、逆説的ではあるが、彼の後の事業形成にはマイナスだけではなかった。

ミュラーやその集会にとって、結果的にはその運動の方向性として、「ダー

ビ派」「ダービ主義」という呪縛から解放され、開かれた教会形成を目指す起点になっていく。これが後にオープン・ブラザレンと称される所以である。それはつまり、ブラザレンという一つの教派（セクト）から解放され、一切の教派を超えた開かれた信仰復興運動という真の意味でのブラザレン運動として「運動」の性格を明確にしていくのである。それはつまり、「キリスト集会」派という一つのセクトを形成する方向とは真逆のベクトルである。

このことは、彼の事業面でも具体的に表れていく。実際、1836年に開始したミュラーの孤児院事業も、またそれを支えた聖書知識普及協会（1834年創設）にしても、その後、先の筆者の論文（2018）でも明らかにしたように爆発的な発展をみせていく。実際ブラザレンの分裂の翌年の1849年には、ミュラーはブリストルの孤児院を郊外のアシュリー・ダウン（Ashley Down）に広大な土地を購入し孤児院の建物を建築して移転し、これにより孤児事業は本格化し、大幅に規模を拡張していく転機となる。これは、ブラザレン運動の分裂と挫折とは無関係とは考えにくい。このような孤児事業は「キリスト集会」だけが事業を支えたものではなく、その枠や派に拘らず、キリストを信じる多くの方々が賛同し、教派を超えて、支援していくことになる。ミュラーの孤児事業は、その会計記録の詳細を残しているが、のべ10,000人以上の孤児を養い、孤児院への献金の総額は1,500,000£（現在の物価で86,000,000£となり、日本円で129億円）に及ぶ（Pierson 1899; Müller 2011; 木原 2018）が、これらは、一つの教派やセクトでは不可能であったことは容易に想像できる。つまり、福祉事業は、セクトの枠に留まる限りその発展は困難であるが、それを超えて社会へ開かれたものとされるとき、飛躍的に発展していくのである。ミュラーの事業もその通りであった。

また、国際的広がりとは海外宣教という意味においても、セクトを超えたことは大きな意義をもつ。ミュラー自身も孤児事業は娘のリディアと義理の息子ライト夫婦に委ねて、70歳になった1875年から世界宣教に出かける。そして世界

42か国に及ぶ200,000マイル（地球8周）への宣教となるが、ここにおいても、基本は「招かれたところであるならどこへでも行く」という姿勢で、教派性を超えているのが特徴である。王室やカトリック、主流派の教会、団体、大小問わず福音宣教の大会、小さな家庭集会にいたるまで、聖書をもって福音を伝えるに出かけていくというフェイス・ミッションの独立型伝道者の姿勢こそが、生涯彼を突き動かした宣教姿勢であった。既に81歳になった1886年に来日し、新島襄の招きで同志社においても、歴史に残る説教をした。そこではセクトとしての「キリスト集会」のミュラーではなく、また「牧師」でもなく、「一人のキリスト者（兄弟）」のミュラーとして堂々と建設したばかりの同志社礼拝堂の講壇にたち、「信仰の生涯」というテーマで同志社の若き学生たちへ熱弁をふるった（木原 1993）。この説教内容そのものからもミュラーのフェイス・ミッションの姿勢が濃厚に見受けられる。

これが当時の若き山室軍平、石井十次たちへ甚大なる影響を及ぼしたことはすでに明らかにした通り（木原 1993；1999）であるが、これも彼がセクトの枠に留まっていたなら成しえなかったことであろう。そして期せずして山室軍平、石井十次を通して、ミュラーの思想は、日本の社会福祉史の本流のなかに立ち現れて甚大な影響を与えていくことになるのである。そのように考えると、本来日本の社会福祉とはまったく無関係なように見える英国のキリスト教史に小さな出来事として立ち現れるブラザレン運動というものが、人知れず日本の社会福祉形成に計り知れないような影響を与えていくというのは、不思議な「神の見えざる手」としかいいようのない出来事なのかもしれない。マックス・ウェーバー（Max Weber）が説いた「転轍機」の作用の一つということなのであろう。

注

（1）「プレズレン」と表記する例もあるが本稿では現代用語の表記に従い「ブラザレン

- ン」と表記している。
- (2) 同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究1・2』（みすず書房、1978）に詳しい。
 - (3) メノナイトとの区分を明らかにするためにプリマス・ブラザレンと呼ぶ場合もある。
 - (4) たとえば、台（2011）参照。
 - (5) アイルランドは、現在、イギリスから独立した国家であるが、この当時はイギリスの一部であったことで本稿のタイトルも「英国」としている。
 - (6) 現在でも聖餐式という呼称は使わず「パン裂き」（breaking bread）と表現している。
 - (7) これは一定の組織に頼らず、ただ神への信仰によって宣教や事業をなすというもので、グローヴスをその先駆者とし、ミュラー、そしてハドソン・テイラー（Hudson Taylor）などがその系譜とされている。
 - (8) ダービのディスペンセーション主義の教説は、アメリカの神学者であり、説教者として著名なスコフィールドによって、福音派全般に浸透していくことになる。なぜなら彼の注解が付された「チェーン式バイブル」が全米の教会で多く受け入れられ、汎用されたからである。
 - (9) 「ブラザレン」という呼称は、他宗派が名付けた特徴であるが、「牧師」ではなく、「兄弟たち」（brethren）が牧会していることに由来する。
 - (10) たとえば、Sibthorpe（1903）は、Neatyby（1901）の著作への反論である。
 - (11) “Plymouth Brethren” Archive 公式サイト <https://www.brethrenarchive.org/> に全文あり。
 - (12) ダービの一連の書簡等は、一部保存公開されており、“Plymouth Brethren” Archive 公式サイトや、The University of Manchester Library, “Christian Brethren Archive” 公式サイトにて閲覧可能である。

参考・引用文献

- Baylis, Robert (1995) *My people: the story of those people sometimes called Plymouth Brethren*, Canada: Gospel Folio Press.
- Broadbent, Edmund Hamer (1931) *The Pilgrim Church*, London: Pickering & Inslis LTD. = E. H. ブロードベント 著、古賀敬太 監訳『信徒の諸教会—初代教会からの歩み—』伝道出版社、1989年。
- Bruce, F. F., (1940) “The End of the First Gospel,” *The Evangelical Quarterly* 12: 203-214.
- Coad, F. Roy (2001) *A History of the Brethren Movement: Its Origins, Its Worldwide Development and Its Significance for the Present Day*, Vancouver: Regent College

- Publishing.
- Craik Henry & Müller, George et al. “Letter of the Ten”.
- Dann, Robert Bernard (2009) *Father of Faith Missions: The Life and Times of Anthony Norris Groves*, U. S.: Authentic Media.
- Dowley, Tim ed. (1977) *The History of Christianity*, England: Lion publishing.
- 同志社大学人文科学研究所編 (1978) 『戦時下抵抗の研究 1・2』 みすず書房.
- 同信会百年史委員会編 (1989) 『恥はわれらに ほまれば神に —キリスト同信会の100年 1889-1989—』 同信社.
- George Müller org 公式サイト <https://www.georgemuller.org/>
- George Müller 資料館公式サイト <https://www.mullers.org/>
- Grass, Tim (2006) *Gathering to His Name: the Story of Open Brethren in Britain and Ireland*, London: Paternoster Press.
- 川向肇「プリマス・ブラザレンの歴史と特徴」<https://notesonbrethren.wordpress.com/>
- 木原活信 (1993) 「同志社のアイロニー —山室軍平の中途退学—」『新島研究』第82号.
- 木原活信 (1999) 「ジョージ・ミュラーが石井十次に及ぼした影響」同志社大学人文科学研究所編『石井十次の研究』同朋舎出版.
- 木原活信 (2018) 「ジョージ・ミュラーの思想形成におけるフランケの敬虔主義の影響について」『評論・社会科学』(127) 1-17.
- Livingstone, E. A. (2006) *The Concise Oxford Dictionary of the Christian Church*, Oxford Univ. Press (=木寺廉太訳『オックスフォードキリスト教辞典』教文館).
- Müller, George (2011) *The George Müller Collection: Autobiography; Answer to Prayer: Counsel to Christians; Preaching Tours and Missionary Labours*, Kindle Edition.
- Müller, George (1996) *The Autobiography of George Müller*, Mass Market Paperback. (Originally Entitled, “The Life of Trust: Being a Narrative of the Lord’s Dealings with George Müller”).
- Müller, George (2017) *Answers to Prayer*, Paperback A.E.C. Brooks.
- Neatby, W.B. (1901) *A History of the Plymouth Brethren*, London: Hodder and Stoughton.
- Pierson, Arthur Tappan (1899) *George Müller of Bristol*, London: James Nisbet & Co.
- Ryrie, Charles, C. (1966) *Dispensationalism*, Moody Bible Institute =チャールズ C. ライリー著 前田大度訳(2018)『ディスペンセーション主義 DISPENSATIONALISM TODAY—聖書を字義通りに理解するために—』エマオ出版.
- Sibthorpe W.M. (1903) *A Defence of the Truth: called for by Neatby’s “History of the*

Plymouth Brethren.” ULAN Press.

Smith, Nathan Delynn (1986) *Roots, Renewal and the Brethren*, California: Hope Publishing House.

Steer, Roger (1997) *George Müller: Delighted in God*. Tain, Rosshire: Christian Focus.

台豊 (2011) 『集会は“ブレズレン”か?』伝道出版社.

The Brethren Archivists and Historians Network (BHAN) 公式サイト <http://brethrenhistory.org/home.htm>

The Scriptural Knowledge Institution (SKY) 公式サイト <https://www.mullers.org/>

The University of Manchester Library, “Christian Brethren Archive” 公式サイト <https://www.library.manchester.ac.uk/search-resources/special-collections/guide-to-special-collections/christian-brethren-collections/>

Weremchuk, Max (1992) *John Nelson Darby: a biography*, New Jersey: Loizeaux Brothers.

“Plymouth Brethren” Archive 公式サイト <https://www.brethrenarchive.org/>

*なお、本研究は JSPS 科研費 JP19H01601 の助成を受けています。

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP19H01601.

(第19期第2研究会による成果)

(第20期第1研究会による成果)